

民俗行事の特徴に合わせた保存・継承方法の検討 ―七尾市中島地区を事例として―

指導教員：金沢星稜大学 経済学部 准教授 堂下恵

参加学生： 奥美彩子・窪田充泰・兒玉和樹・紺野螢子・高橋侑加・中谷元宣・中田智英・中宮鳴木
西川香奈子・濱野明宏・松村直樹・宮崎裕加里・藪下幸子・綿井秋子・(五十音順)

1. 調査研究成果要約（200 字以内）

本活動では七尾市中島地区の「虫送り」・「熊甲二十日祭の杵旗行事」に学生が外部者として参加し実地検証を行うとともに、地域住民を対象に外部者参加による行事の保存・継承について意識調査を実施した。行事の種類にかかわらず9割強の住民は今回の外部者参加を評価していたが、同時に、4割弱は行事によって外部者参加の是非を判断するべきだと考えている。外部者参加を継続するなら安全対策と交流方法の改善が求められる。

2. 調査研究の目的

石川県能登地方で継承されてきた民俗行事の多くは、過疎化・少子高齢化のため担い手不足に直面し、存続が危ぶまれている。外部者の参加受け入れによる担い手の確保は今後の保存・継承に有用な方法の1つであり、奥能登地方で実施されている複数のキリコ祭りをはじめ、本研究で取り上げる七尾市中島地区の国指定重要無形民俗文化財「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」や同地区小牧・外の伝統行事「虫送り」でも試みられている。しかし、外部者参加による保存・継承が全ての民俗行事、特に国指定重要無形民俗文化財にまで有用かどうかは慎重に検証しなければならない。本研究では、七尾市中島地区の「虫送り」ならびに「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」を対象に、民俗行事の特徴に合わせた適切な保存・継承方法を検討する。

3. 調査研究の内容

本研究を計画した段階では、七尾市中島地区の民俗行事を事例に、民俗行事の特徴に合わせた適切な保存・継承方法を検討、提案するため、以下の2点の実施を考えていた。

- (1) 民俗行事の認知度、文化的価値、保存・継承状況の検証…文献調査、実地調査
- (2) 外部者参加による民俗行事継承の検証…実地調査

実際の調査研究活動では、時間と予算の制約から主に(2)について調査研究を実施した。具体的には、どぼんこ・さるたひこ地域協議会の協力のもと、七尾市中島地区の「虫送り」「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」に学生が外部者として参加し、行事の現場で起こる諸問題や効果を参与観察で確認し、外部者参加によって民俗行事が文化的価値を損なうことなく継承していけるのか検証した。また、地域住民に事後アンケート調査を実施し、地域の反応を検証した。具体的な調査活動は以下のとおりである。

①「虫送り」に関する実地調査

「虫送り」とは、かつては全国各地で実施されていた豊作祈願・害虫駆除のための民俗行事である。昨今、農薬や殺虫剤による害虫駆除が可能になったことや住宅が密集する場所で松明を持って練り歩くと火災の原因になること等から、実施する地域が急速に減少している。虫送りを対象とする外部者参加の受け入れについての調査は、まず、過去の行程表や資料を用いて行事の意義や実施内容を確認し、2010年6月12-13日に七尾市中島町小牧の活動に学生が外部者として参加して実地検証・情報収集をおこ

なった。その後、参加者の意見を集約し、外部者参加の利点・改善点等を検討した。虫送りの行事への参加概要は以下のとおりである。

・6月12日 13:00～15:00…虫送り準備

七尾市中島町小牧壮年団の指導のもと、虫送りで使う松明を作成。持ちやすい長さに切った竹の一番上の節に灯油を注ぎ、その中に芯と灯油の栓になる手ぬぐいを詰める。また、虫送りのルートを歩きやすくするために危険な道には木の板を敷いて補強した。

・6月12日 19:30～20:30…虫送り

昼に作った松明に火を灯し、学生は住民とともに決められたルートを歩く。その際に田んぼ周辺に生息する害虫「どろ虫」に出ていけという思いを込めて「どろむしゃ～でて～け～」と叫ぶ。小牧区の害虫を隣の外区に追い払おうという冗談を含んで「小牧のどろむしゃ外（そで）でて～け～」と叫ぶこともある。力に自信のある者は長さ2メートル以上、直径30センチメートルほどの特大松明を持って練り歩いた。

・6月13日 5:30～9:00, 10:00～14:00…里海ごつつお教室

翌13日は、小牧壮年団をはじめとする地域側の、参加者と交流して小牧を好きになってもらいたい、秋のお熊甲祭にも参加してもらいたい、という思いのもと、地域体験プログラムが提供された。具体的には、早朝から七尾湾岸の防波堤にて釣りをし、クルーザー数台に分かれて七尾湾内の生態を観察した。その後、釣った魚のさばき方を実際に教えてもらい、調理した後に地域住民と一緒に食して交流した。



図1：虫送り準備の様子



図2：虫送り参加の様子

②「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」に関する実地調査

国指定重要民俗無形文化財の「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」は毎年9月20日に実施される祭礼で、9月19日の「奉幣迎え」と呼ばれる事前行事などを経て、20日朝に七尾市中島地区の19の末社から神輿・杵旗などが本社である久麻加夫登阿良加志比古（くまかぶとあらかしひこ）神社に参集し、同神社で神事を執り行った後、本社の神輿の行例を先頭に各末社の神輿・杵旗がお旅所まで供をする行事である。お旅所に到着後は「島田くずし」と呼ばれる杵旗の乱舞があり、地域的特色のある秋祭となっている（文化庁・国指定文化財等データベース参照）。「お熊甲祭」と称されることが多い。

本調査では、虫送りと同様に事前学習を実施した後、2010年9月19～20日に七尾市中島町小牧区の準備、事前行事である「奉幣迎え」、当日の杵旗行事に学生が外部者として参加し、実地検証・情報収集を実施した。その後、参加者の意見を集約し、外部者参加の利点・改善点等を検討した。熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）への参加概要は以下のとおりである。

・9月19日 9:00～12:00…祭り準備

七尾市中島町小牧壮年団の指導のもと、地域住民と一緒に学生が祭礼で使用する花笠の飾り付けやワラジを作成。また、高さ約20メートルほどの杵旗の旗杵・旗竿を磨き、準備を手伝った。

・9月19日 13:00～15:00…祭りごっつお教室

小牧壮年団による地域体験プログラムに参加。このプログラムは、女性が杵旗行事に直接参加できないことを懸念した同壮年団が、女性の参加者にも祭りの一体感を味わってもらおうと企画・実施した体験プログラムである。里芋、こんにゃく、釣りたてのイイダコを使用し、地域住民と一緒に「いもだこ」という能登の郷土料理を作った。

・9月19日 15:00～16:00, 18:30～19:30…奉幣迎え

お熊甲祭の事前行事である「奉幣迎え」は、各末社から本社に使いが出向いて御分霊を迎える行事である。使いが各末社に戻ってくる際、高張提灯と呼ばれる3メートル近くあるとても大きな提灯を掲げて使いを誘導し、鉦・太鼓が出迎える。今回の参加では、住民の配慮で祭り当日に杵旗を担げない女子が高張提灯を持ち、先頭と最後尾を歩いて祭りの空気を味わった。

・9月20日（月）6:30～17:00…お熊甲祭

本行事には、男子学生が杵旗の曳き手・担ぎ手として、女子学生は男子学生のサポートならびに見学者として参加した。祭りの主な流れは、次のとおりである。ほとんどの末社の神輿や杵旗がお旅所周辺に集い、行列をなして熊甲神社に向かい、到着順に先導の猿田彦が到着を告げ、神輿や杵旗、鉦・太鼓が何度も拝殿に向かって走りこむ。19末社全てが到着した後は、猿田彦が鉦・太鼓に合わせて乱舞し、神事を執り行う。その後、各神輿や杵旗が到着時と同様に何度も拝殿に向かって走りこんでから境内を出てお旅所を目指して進んでいく。お旅所に各末社の杵旗が到着すると、お旅所内を周回しつつ杵旗を90度に傾けて地面に触れる直前まで下げる「島田くずし」が披露される。曳き手・担ぎ手として参加した男子学生は、行例が移動する際は杵旗を曳き、本社・お旅所では杵旗を肩に担いで祭りに深く関わった。

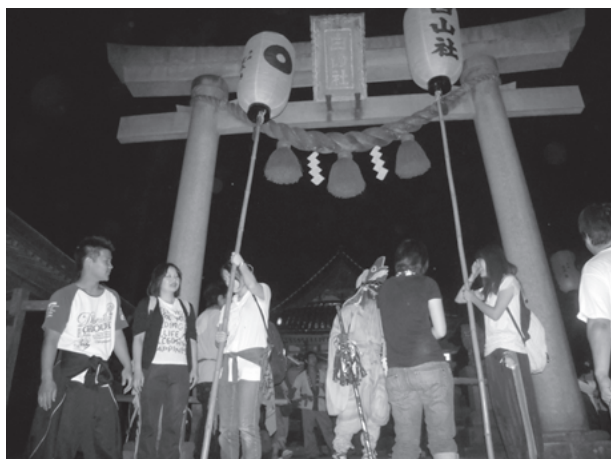


図3：奉幣迎え参加の様子



図4：お熊甲祭参加の様子

③七尾市中島地区小牧の住民へのアンケート調査

本調査では、民俗行事へ外部者を受け入れている七尾市中島町小牧の住民に対し意識調査を実施した。具体的には、堂下ゼミナールでアンケートを作成し、どぼんこ・さるたひこ地域協議会にアンケートの印刷、配布、回収を委託する形で実施した。回答数は104であった。アンケートの質問内容は、主に「学生や外部者が地域の行事に参加することについて賛成か反対」、「学生や外部者が参加して良かった点や悪かった点は何か」、「地域行事を実施していく上で困っていることは何か」といった点である。

4. 調査研究の成果

上記の調査活動で得られた成果の概要は以下のとおりである。

①「虫送り」における実地調査結果

虫送りならびに関連プログラムへの外部者参加において、どぼんこ・さるたひこ地域協議会や小牧壮年団は「地域の一員となってもらえるような人を育てていきたい」という想いを有し、積極的に民俗行事への参加受け入れや地域体験プログラムの企画・運営を実施していた。参加した学生の視点から振り返ると、虫送りそのものの準備や本番については、小牧壮年団団員ら地域住民を中心に参加学生も協力して行事を進めることができたと思われる。準備では竹を材料とした大・小の松明づくりや、あぜ道の補強を手伝い、わきあいあいと作業を進めた。虫送り本番では地域の子供から大人までたくさん集まり、この日を待っていたかのごとく楽しく、声をだしながら村道を歩いた。

また、虫送りに付随して行われた地域体験プログラムでは、地域住民の指導の元、七尾湾で釣りをし、釣った魚の調理方法を教えてもらいながら料理して食すという、参加者にとっては貴重な経験ができた。このプログラムを通じて、住民らと外部の参加者が交流することができ、参加者にとっては地域の長所を知る機会となり、七尾市中島町小牧への愛着を深めることにつながった。

他方、実地調査によって、外部者参加による民俗行事の継承において複数の懸案点が見出された。まず、虫送りの実施において、松明を持ちながら歩く際の火の扱いについて明確な注意がなく、事故等が起こるリスクがあったといえる。地域住民のみで実施している場合、長年の経験から言語化されていないリスクマネジメントが成立していると推測できるが、外部者参加を継続していくには、火の取り扱いについての事前講習を組み入れるなど、参加者の安全を確保するための方策を講ずることが重要になる。

次に、行事や地域体験プログラム全体を通して、参加した学生と地域の人々の間に常に一定の距離が存在した。例えば、地域体験プログラムで座して活動する際には、席順が常に学生と地域住民とで分けられていた。伝統行事の保存・継承に外部者を巻き込むためには、外部者の地域理解が不可欠であり、今後は所属の区別なく食事や作業時により深く交流が持てるような仕掛けが必要である。加えて、同プログラムは虫送りの翌日に実施されたのだが、七尾湾での釣りが含まれていたためか集合・開始時間が早朝となり、地域住民・外部参加者、両者にとって余裕のあるスケジュールだとは言い難かった。また、釣り餌が生きた虫だったことから、生き物が苦手な参加者の満足度は低かった。ちなみに、今回のプログラム参加費は 3000 円に設定されていたが、今後、プログラムの内容を改良して継続・発展させる際には、参加費の金額設定についても再検討すると良いだろう。

②「熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）」における実地調査結果

熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）にかかる一連の活動への外部者参加において、どぼんこ・さるたひこ地域協議会や小牧壮年団は虫送り等の受け入れと同様に「地域の一員となってもらえるような人を育てていきたい」という想いを有していたが、それよりも、外部者受け入れによって重要な伝統祭礼の担い手を確保し人手不足を解消したいという意識が強いようであった。参加した学生の視点から振り返ると、祭りの準備作業においては、積極的に参加できた者からは、「杵旗の大きさや形などを近くで見られたことはいい経験」「花笠やワラジが祭りで使われているのを見てうれしかった」といった感想が聞かれた。他方、あまり準備に関われなかった者からは、「杵旗しか手伝えなくて残念だった。もっと他に手伝えることがあったらよかった。出来れば地域の方と一緒にやりたかった」「杵旗の組み立てを見たかった」「人手が余っていて何をすれば良いかわからなかった」という意見があった。

祭り当日の参加について、杵旗の曳き手・担ぎ手として参加した男子学生からは、「人手不足を感じずにはいられなかった」「杵旗を持つ人が少ない分、負担が大きくしんどいと思いました」「実際に地域

の人達と一緒に杵旗を担いだけれど、杵旗が重くて、団結力が必要だと感じられました」といった声があがった。男子学生のサポートならびに見学者として参加した女子学生からは、「杵旗を担げないことは仕方がないが少し残念だった」「島田くずしの時、杵旗がとても重そうなので見ていて心配になりました」「地域の人々と関わり、サポートしながらだったので他の見物客の人々とは違った視点で祭りを楽しむことが出来た」といった声があがった。

虫送りの時に課題だと感じられた地域住民と外部からの参加者の距離については、「杵旗を担いでいる時は地域の一員になっていた」「お熊甲祭に参加して虫送りよりも地域の一員になれた」「女子は、奉幣迎えの時に松明を持つという重要な役をさせていただけて地域の一員として参加できました」「虫送りとは違い規模も大きく人手もたくさん必要だったので地域の人々と同じように作業や行動できたと思います。また、祭りに参加している意識も前よりもありました」という意見があり、祭りや一連の行事に直接的に関わることで地域住民と外部者との距離が縮まるといえる。他方、「準備をしている時は地域の一員になっている感じが無い」「杵旗を担いでいる時以外は地域の外から来た人の気持ちが強い」という声があり、準備やサポートでは地域住民と外部者の距離が縮まらないことが示唆された。

なお、お熊甲祭には石川県立大学や神戸大学の学生、関西圏の社会人も外部者として参加していたが、外部者同士の関係性については、「県立大の人とは、今回あまり交流がなかった、あまり熱意が感じられなかった」「神戸大の人はとても親しみやすく、すぐに打ち解けることができ、地域の人や私たちに積極的に接していた。また、経験者も多く祭りへの参加意欲が高いことに驚きました」という声があり、同じ石川県内よりも県外、言い換えれば地域的に距離のある外部者同士の方が、積極的にコミュニケーションをとり、参加者として一体感を出そうと試みるのではないかと推察される。加えて、「次回また、参加することがあればもっと積極的にいろんな人たちと接したいと思いました」と、外部者同士の交流の発展を期待させるコメントがあった。

以上、熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）の実地調査から、祭りの現場では人手不足が明確であり、外部から行事に参加した者は役に立っている、地域の一員になれる、という実感を得ていたことがわかる。他方、祭りの準備や参加者のサポートでは一体感を感じることができないようだ。その他、外部者同士のコミュニケーションはお互いの居住地が離れている方が活発になることが推測できた。

③地域住民へのアンケート調査結果

地域住民のアンケート結果について、ここでは地域住民の外部者参加の評価、賛否、ならびに行事の運営で困っていることについて簡単に紹介したい。まず、平成 22 年の虫送りおよび熊甲二十日祭の杵旗行事（お熊甲祭）に外部者が参加したことについて、どちらの行事も住民の 7 割強が「良かった」、2 割弱が「やや良かった」と答えており、行事の種類に関わらず、外部者参加が良いと評価されていることがわかる。地域行事に外部者が参加することへの是非については、住民の 56%が「賛成」と答えていたが、「行事によっては賛成」と回答した住民が 34%、「行事によっては反対」が 4%であり、住民の 4 割弱が一般論としては行事によって外部者参加の是非を検討すべきだと考えている事がわかった。

実際に外部者が参加してよかった点について、複数回答可で尋ねたところ、最も多かった答えが「担い手不足が解消された」であり、62 名（60%）の回答があった。次いで「行事がにぎやかになった」が 60 名（58%）と多く、「（虫送りの）たいまつの数が増えた」38 名（37%）、「地域の良さを外部に発信できた」36 名（35%）が続く。他方、参加して悪かった点について、複数回答可で尋ねたところ、65 名は無回答であった。これは、「特になかった」という選択肢を設定していなかったことや「良かった点」についての無回答が 5 名であったことを考慮すると、外部者参加について悪い点は特になかったと考えている回答者が過半数を占めていることが推測できる。有回答で最も多かったのは「怪我の心配

が増えた」26名（25%）であった。自由記入コメントでは、「地域行事と地域伝統行事の継承とは違うような気がして、参加して頂くことはありがたいのですがそれで良いのか考えさせられます」「課題は継続性。単発であれば受入側も役割分担などが不明確で双方にとって必ずしも満足のものとはなりにくい」といった、伝統行事の保存方法や外部者参加の持続についての声があがっていた。

最後に、地域行事を実施していく上で住民が困っている点について、複数回答可で尋ねたところ、「過疎・高齢化で担い手が不足している」が最も多く66名（63%）であった。次いで、「集落を離れた人が行事にも帰ってこない」が26名（25%）、「年齢層によって行事に対する考え方が違う」が23名（22%）であった。これらの回答から、最も大きな問題は人口減少による担い手不足であるが、次いで住民らが問題視しているのは地元出身者の地縁の消失や地域住民間の意識の違いであることがわかる。

以上、3調査の結果をまとめると次のとおりである。地域住民は、地域行事へ外部者が参加したことについては行事の種類に関わらず高く評価していた。理由は人手不足が解消し、行事が活性化し、かつ地域のことを外部へ情報発信することにつながるからである。しかし、今後も行事へ外部者参加を受け入れていくかどうかについては、住民の約4割が行事によって受け入れの是非を検討すべきだと考えている。外部者が行事に参加することについての懸念点は、参加者の怪我をどう未然に防ぐのか、行事の伝統をどう保護するのか、外部者参加を継続するにはどうしたらよいか、等である。なお、住民が考えている地域行事運営の主な問題点は、担い手不足を除けば、地元出身者の地縁の消失と住民間の年齢層によるギャップであり、これらは地域内で解消しなければいけない課題だろう。

外部から参加する側からは、火を扱う等の危険が伴う行事への参加については安全対策の改善が必要だという意見があり、国指定無形民俗文化財の行事への参加については、直接的に参加すると住民との一体感が得られて満足度が高くなるが、準備やサポート、見学等の間接的参加では満足度が上がらないことがわかった。また、外部者参加を受け入れる際には、地域住民と外部者、所属が異なる外部者間、それぞれの交流を促進する仕掛けを構築・発展していくことが重要ことも示唆された。

5. 調査研究に基づく提言

上記の調査結果を踏まえると、七尾市中島地区の民俗行事においては、担い手不足が深刻であるため、どうやって伝統を守るかという議論よりいかに人手を確保して行事を継続するかという問題が顕著であった。この問題解決には行事の種類に関わらず外部者参加を受け入れることが効果的である。しかし、参加者らの満足度が行事への直接的参加で上がることを考慮すると、外部者の行事への直接的参加の是非、ならびに行事の伝統や雰囲気が変わることに對する是非を慎重に検討することが必要である。また、今回の実地検証から、外部者参加を継続・発展するには安全対策と交流の仕掛けの改良が求められることがわかった。地域行事の運営にかかるその他の問題点は地元出身者の地縁の消失と地域内の年齢層による行事の捉え方のギャップであり、これらは地域関係者らで解決策を検討することが求められる。

6. 調査研究の自己評価

今回の調査研究では残念ながら明確な解決案を示すまでには至らなかったが、行事継承のための諸問題を把握し解決の方向を示せたことはよかったのではと思う。大きな収穫は、小牧壮年団をはじめ地域の方々と交流することができたことであり、もっと積極的に地域の方と話をできればよかったと感じている学生も多い。今後も地域の方々と交流を深めて信頼関係を築き、明確な提案を示せれば幸いだ。最後にどぼんこ・さるたひこ地域協議会、小牧壮年団をはじめ関係者の皆様に感謝いたします。